久慈高等学校にて

卒業おめでとうございます。

誰か残る人はありませんか。誰か残る人はありませんか。あっちこっちに手が挙がっているようだが、その人にもおめでとうと申し上げます。みんな出て行くときに残される。・・・・自分一人になるからである。聖書そういう言葉を贈りたいと思います。自分一人だけ、いままでは一緒にいた学校も、友人も、先生方も、なにかみんなそっちを向いて、背中を向けれて行ってしまうようだ。自分一人だけが、俺一人だけが残されちゃったと、ボーッとした気持ちになるかもしれないけれど、その時「オイッ」と後ろから背中をたたく。背中をたたかれる。「俺が、ここにいたんだぞ」、「オイッ。お前一人になったのか。俺がここにおるぞ」と背中をたたいてくれるものがある。「お前一人残されたと思っているのだが、俺がおるのだぞ、俺がお前なのだ。お前一人だと思っておるのだけれどもいままで、自分が一人だと思っているその自分をはっきり知ったことがあるのか」、「俺一人だ」「俺は独りぼっちになった」と思っている。その俺というものをしっかり見たことがあるのか。その俺が、俺なのだぞ。俺がここにいるのじゃないか、この俺は決してお前から去って行きはせん。お前から離れはしない。そこに、お前の安心がそこに出てくるはずだ。どうだ、いまから、この瞬間から、お前と俺はひとつなのだ。つまり、俺がお前で、お前が俺なのだ。そういうお前に後ろからポンと背中をたたかれるはずなのだと思う。それならば、「いや、生きているうちはお前と一緒なのだろうが、だって俺死ぬときにはお前はどうなるのだ」とこう皆さんの方から後ろを振り向いて尋ねるかも知れぬ。生きているのもお前なのだが、死ぬのもお前なのだ。お前が死ぬのだ。いままでは、人から喜ばされ、俺が喜んだり悲しんだりしていたと思っていたが、実際は、大抵人から喜ばされ、人から悲しまされていたんだ。今日からは、お前が喜び、お前が悲しむのだ。広めて言えば、お前が生きて、お前が死ぬんだ。それだけのことじゃないか、俺とお前が離れるとか、離れぬとか、そんんことは問題外なのだ。お前が死ぬのじゃ無いが、俺が死んだらどうなるのだろう。俺が死ぬときお前は離れてゆくか、そうじゃない。お前が死ぬんじゃないか。お前が生きているということと、同じようにお前が死ぬんじゃないか。そういう意味で、もし残る方があれば、その方にも同じように「おめでと

う」と言いたいと思います。ご希望があれば、今からでも遅くない今日出した答案を、ちょっと待ってくれと言って取りに行ったらよい。これは実は私の今日の話の結論なのです。結論をうっかり先に話してしまったものだから、もうこれで「さようなら」と降りて行っても、私もいいし、諸君もほっとするかもしれないけれども、世の中の約束というものはそういかぬもので、しばらくの間お付き合いをしていただきたい。

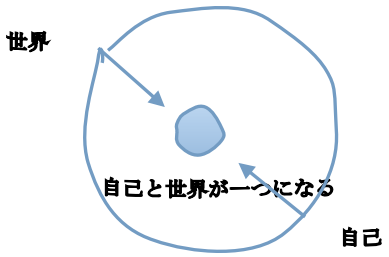
私、中学校を卒業する最後のこの日に、どういうことを考えたかというと、一分も早く家に帰って、すぐ寝て、明日の朝から十日間も二十日間寝通してやろうと、それ以外のことは何も考えなかった。それだけ一方から言うと、五年間、悪戦苦闘して疲労困憊してきたことだと思うのですが、そのときに、今日まではとも角生きているが、今夜からぐっすり明日を忘れて、ぐっすり眠ってしまう。実際眠ったのですが明くる日になってみると、一日朝寝をしてみたら、もう明くる日からは寝る気が起こらなくなって、やっぱり早く起きるようになりましたが、起きているのと、眠るということと、目が覚めているということと何かこの間に連続が一旦きれる。この正体がわからない。これを別の言葉で言えば、これを「生」と言い、これを「死」という。この間をつなぐものは一体何んだ。この実体は一体何なんだ、これをつなぐものは。こういうことを考えたいと思うのです。

皆さんはこれから、いわゆる普通の言葉で言えば、立身出世というのですが、立身の「立（りつ）」は「立つ」と書く。「出（しゅつ）」は「出る」と書く。身を立てるとは自分の姿を世に表したということでしょうね。世に出るということは世にも出なければ、世に隠れていることなのだ。隠れているのでは生きがいがない。世に出てやろうと姿を表すという、そういうことを、一応一般的な言葉で「表現」という。表現欲があるとこう言いたい。別の言葉で言えば、「スタイリスト」、俗な言葉でスタイリスト。諸君らは髪をのばしてこうする（髪をなでる動作）。制服制帽をちゃんと着けて鏡を見る。内容からいえば、「認められたい」ということでしょうね。こういう欲望がある。認められたいということは、どっか人と違っていなければならない。皆と同じでは認められない。何か違った形をとろうと思う。皆と違ったもの、違った形をとるということは、差別を表すことだが実際には違った形をとることによって皆と同じように認められたとい

う平等への意欲があることだが、差別を通して平等へという、このほうが本当のねらいなのだ。したがって、一方から言えば、模倣ではだめである。人から認められたいということは、人から区別されたいということのようであるが、そのことによって、人と同じように俺も大手を振って世の中を歩いてみたいという気持ちなですから。単に模倣では認められることにならない。模倣でなければ創造ですね。表現欲の根本には創造への意欲がなければならない。創造ということは自由ということだ。そこで表現欲の奥には自由と平等への根本的なわれわれの欲求があると思う。いままでは、たとえば最初の話では人から、他のものから喜ばされ、悲しまされたけれども、今日から自分が喜び、自分が悲しむ、これが自由な世界です。ただし、その段階でははっきりした平等はまだ出てこない。それから先に出てくるものだと思うのです。創造ということは、生理的に皆さんもご存じだろうと思うのですが大脳皮質の研究が進んできて、皮質に上層と下層とがある。生理の方でお習いでしょうが、下層の方は本能的な支配で、上層の方はいわゆる人間としての文化を創っていく機能をするものである。上層の皮質の発達が、動物に対する今現在の人間の文化的な優位を作り出したものである。そういう意味で動物も同じ一つの表現だろうが、表現そのままであるから不自由である。だから、豚が豚の形をして歩いていても、そこには創造としての意味は認められない。けれども、諸君らは髪の毛ひとつの撫で方によっても、豚が毎日これを（髪を櫛でなでる動作）やっていたということは知らない。われわれは髪をこうやる。こういう意味で、大脳皮質から人間と動物とが区別された。人間の自己表現がつまり文化ということである。諸君らがこういう特殊な制服制帽をそれからそのようなスタイルをしているということが、ある段階における文化人の象徴なのでしょうね。私がこうして自分で自分の喉を絞めるようなものをぶら下げていることも文化人の一つの資格らしい。

　科学とか芸術とか、道徳とか宗教そういう全体としての人生、こういう文化の内容。これを引っくるめた全体としての人生とか、あるいは世界それと、自分という個人とあるいは自己との関係、これは自由と平等という意味はどういうようにここから出てくるのであろうか。これが動物から進化してきた人間の現段階において自由と平等とを人間の発達の最後の段階における最後の結果として、どういう姿をとって文化の内容となってきている

か。



そここでこういう図に表すと、これが世界、ここにこれが自己である。世界との自分との関係を具体化するのに二つの行き方がある。一つは世界の方から自己の方へ。これは世界の創造、最初に世界が創造されたという立場をとる。もう一つは反対に自分の方から世界の方へ向かって行く、これは自己の創造ですね。私はキリスト教はちょうど前者の形をとり、仏教の方は後者の形をとっていると思う。仏教の方は自分自身を創りあげていく、人間自身を創りあげていく。キリスト教の方は世界がまず創られた。誰が創ったかというと、それは神が創った。神の方からということになる。神がまず世界を創ったのであるから、創造としては完全なはずであるけれども、そこに人がいるということはどうしも始末が悪い。一度これを外に出さねばならない。人間を追放しなければならぬ。一度これをこの世界の外に追いだしておいて、改めてそれをどういうように取り入れるか。このような形をとらざるを得ない。仏教の方では、自分の中に自分と一緒に世界を創りあげていく。自己自身を創造していく程度に応じて世界そのものも創りあげていく。自分の中に世界がある。世界と自分を一緒に創りあげていく。ところが、キリスト教の方は最初に一度世界が創られたのだ。その意味で仏教は外に自分の他に神というものはない。そこでキリスト教の立場では一度自分を外に追い出すのである。追放であるからそこに罪の意識が出る。仏教の方では神はないのであるから罪の意識はない。罪の意識は「裁き」、お前はこうしたのだからという条件をつけて一度外に追い出さねばならない。そしえそれを再び取り入れる。だから裁きの裏は愛ですね。ところが仏教の方ではこのような反対の段階がない。一度否定しておいてそれを取り入れるということがない。その気持ちを

あらわす言葉が「慈悲」である。だから「愛」と「慈悲」という言葉のニュアンスの違いを実際の日常生活でじっと味わうことが大切でしょう。私はここではその違いを、はっきり諸君らに伝え得ない。諸君もこの話だけでは、何か言葉の違いだけのように受け取られるかもしれないが、よく考えてもらいたい。例えばこう言えますかね。譬えは少し悪いが、継母の場合とそうでないお母さんの場合とそういうと、そういう家庭におられる方には申しわけないようだけれども。学校等でもそうですね。諸君らのいわゆる素行が良いとか悪いとかで、「一度前は外へ出ろ」。場合によってはその外へ出ろという意味は、近い場合には小学校の頃には座席から、その教室の隅という距離があった。もうちょっと酷いのになると廊下までという距離になる。最後には三日間の停学などということになる。あるいは一年間・・というようなことになる。そして、一度裁いておいて、「しかし、・・・」と言って取り戻すときのその意識と、いつも諸君らは　　みな親から見ればいたずら小僧として育ってきたと思うが、この手に負えないいたずら小僧を、とにかくお母さんがいままで手塩にかけて、あるときはなだめたり叱ったりして育ててきたそのときのお母さんと諸君とのつかず放れずの、これは普通愛と呼んでいますが、それを親の愛と呼んだのではちょっとぴんと来ない。本当の意味のムードがわからない。それを「慈悲」と、こう呼んでいる。仏教の愛のことを慈悲と呼んでいる、ここのところが違う。ちょうど裁いておいて云々というのではない。それならば愛の対象になるものは罪であるが、慈悲の目から子供を見た場合に、親の目から子供を見た場合には、ここに出てくるものは「煩悩」である。お母さんの目から諸君を見ると、どの子供も憎い子はいないがいわゆるいたずらっ子である。子供の頃は何をさておいても食べたいものをしょっちゅうねだる。学校から帰ると戸棚をあける。そういう子供の欲望を仏教では「煩悩」と言っている。それを慈悲というものが直接見ている。「愛」の方は「罪」を見ている。まあそのように区別できるのではないかと思う。

　この世界は煩悩という立場から見ると苦の世界である。したがって、煩悩を背負っている限りにおいて、例えばわれわれは毎日毎日眠たい、眠たい、食べたい、食べたい、この世界に流されている。流転している、この世界の上をおおっているのは煩悩である。その世界の上に煩悩を背負って、煩悩と共に、この自己が、われわれが時

間と共に流されていく。これを流転と言っている。流転の世界の原理というものは、因果関係である。これを「宿業」と言っている。　諸君らがいま、何年か三年間か、五年間かこの高等学校にいてようやく卒業の間際にきたということは何らかのいままでの宿業によるものだ。つまり因縁、因果関係によるものだ。先祖代々からずーっと結局なんのかんのと言っても、この久慈の高等学校に入らざるを得なかった、入っては好むと好まざるとにかかわらず三年間このので苦しみ、喜んだり悲しんだりして今日の卒業に日にぶっつかざるえお得なかったのである。俺はぶっつからないと言ったところで、何らかこうしてここまで追い込まされてきたのだ。押し流されてきたのだ、これを宿業という。どちらにしても、仏教の立場にしてもキリスト教の立場にしても目的は世界と自分とが一つになるといいうことなのである。世界と自分とが一つになるということ、一つになるということは別の言葉で言えば自主的になるということ、主体性を持つということ。あるいは自主性の回復といってもよいでしょうね。自主をとりもどす。あるいは何らかの意味でそれまで分かれていたものが、ここで一つになる。自主性の回復、主体性の回復、これを自由という。このことは流されるということではない、ということは何らかの意味で、宿業の糸を断ち切ったということ仏教で言えばそういう意味でしょうね。自分が真の自分になるということ。このことは自分が世界と切り離されているということでなくして、自分が世界の中の中心になる。キリスト教でいえば神と自分とは一つになるということでしょうね。仏教で言えば自分が世界と一つになる。自分がこの世界の中心になる。いままでに何らかの意味では対立していたわけである。

で、この自分が世界の中心になったときに初めて、自分と同じ他人を見いだす。いままでは自分というものがはっきりわからないでいて、例えば自分が喜んだと思っていても、実際には喜んでいるその自分がわからなかったのであるから、他人というものもはっきりわからなかった。他というものがはっきりわからなかった。いま、自分が世界の中心になったときに、他人を、「他」を発見する。だから「自」の発見と他の発見とは同時なのですね。だから例えば一番初めの、後に残る人のこと、自分の肩を自分がたたいたときに、後ろから「オイッ。お前が俺だ」と言ってたたかれたときに自分に出会ったわけだから、初めて「他」、昨日までの友人がなにか自分を捨

ててそっちの方に行ってしまうように、学校も、学校の先生も、友人も、皆んな自分だけを一人置きっ放しにして、自分に背中を向けてむこうに行ってしまうように思ったのはまだ自分の影を友人の上に見ていたわけでしょうね。それがいまこれが自分だとはっきり分かったときに、むこうに行くものが本当に他人だった、言い換えれば本当に友人が友人だった、先生は先生だったということがそのときにわかる。自の発見とは同時なのだ。そういう心の転回を仏教では「回心」という。

心をめぐらすというのですね。むこうばかり向いていたのを百八十度後ろを見る。自分はどこにいるのだとむこうばかり見ていたときに、「オイッ」と自分に方をたたかれる。ふっと後ろをむく、「オッ。お前だったか」　そのお前が自分なのだから。それを「回心」という。

おの場合にいままでの表現の欲望が、自分自身の中に内化していくわけですね。それを「願」、「願い」という。たとえば何か物を欲しいときにも「おい」と言えば泥棒になる、欲しいからとって行くぞといえば泥棒になる。しかし、「これを分けていただけませんか。お願いします」と言えば泥棒にならない。物をとることにはかわりはない。金を借りる場合にも「どうか、こういうわけで困っているから金を貸してください」と願う。それから「おい、俺は金が欲しい。その金をこっちへよこせ」と形は同じだが内容がすっかり違う。欲望が願いになる。だから表現を出した場合にこの表現の内容は、本来はこれは欲望だったね。この欲望だったのが「願い」になる。というのはもう一つ深めていくと「願われている」ということになる。

妙な言い方をするようだが、人は金を持っているから、自分がその金を欲しいからといって近ごろのニュースの十七歳の少年のように相手を刺してでも自分のものにするのが欲望である。しかし、「その金を、必要だから貸していただきたい」というこちらの願いを出すときには、むこうとこちらとの間に、その金そのものが願いの対象になっている。願いの対象になっているということは、その場が既にむこうとこちらとが同じ願いの場の中にいることになる。そうでないと「ものをいあただきたい」と言っても成り立たない。どこか、それが根源的には成り立つという予想というか、あるいは予約がある。諸君も、金がなくて困っている。親に言ってもだめだ、だけど兄に言ってやれば何とかなるということは、兄と自分とが両方ともある金なら金というものについて、願いの

共通な場にいるということになる。だからこちらから願うときには兄さんに「千円、なんとか欲しいのだが」と願うときにはすでに自分自身が、「お前には千円送ってやるぞ」と、こちらの方が願われているのだ、という。やや虫のよい話に聞こえるかな。こちらが、初めから兄さんからみれば可愛い弟だ、という心の前提があるわけですね。こちらから願うときには既に自分自身が願いの対象になっている。願われているわけなのです。それがこの表現の具体的な内容になっている。

そこで、いま「回心」と申しましたが、回心の前にちょっとストップしなければならぬところがある。ちょうど回心というのは、長い夜がずーっと続いてきてポッと夜明けになるようなものですね。夜が明ける。この夜明けの前に、今で言えば何時頃になるか、四時か五時頃でしょうか、夜明け前にそのまますーっと明るくならないで一度ぐーっと暗さが深まってポッと夜が明ける。気象界の科学的な部門ではどう言うか知らないが、日常生活ではみな経験するところですね。「夜明け前の昏迷」と言われるものですね。夜がそのまますーっと明るくなればいいのだが、夜明け前の昏迷とか、夜明け前の暗がりというのがある。これは求めている自分が自分を見失う。求められている自分が自分から離れていくようだ。何かそこに求めるものと求められているものとの間に、しっかりした綱がある間は苦しくても、紆余曲折でも三年間悪戦苦闘して生き続けてきたのであるが、もう少ししして卒業も確かだという間際に、求めている自分が自分を見失う。求められている自分が自分から離れる。これを「ニヒリズム」と呼んでいる。

私がなぜこのように申すかというに、去年あの校歌披露のときに申し上げたことが私自身忘れられない。心から離れられない。いや、心から離れられないものがるから、あの機会に初めて声を挙げたのだが五年間この学校にお世話になっている間に、在校生としては三人自殺している。近い在校生を確かめると五人くらいになりそうです。そうすると毎年一人くらいずつ自殺者が出たことになる。それはどういう原因であるか、どういう家庭の事情であるかなどを詮索することは、全く余計なお世話だと思う。要はその人の命は自分自身を探り求めている途中で、自分自身を見失いかけたのだと思う。その心の痛ましさですね。実際その自殺の現場にも私が行ったことがある。いまだ頭の中から離れられない。そのニヒリズムの厳粛さというもの　　ニヒリズムと言えば、あの

男はニヒリステックな男だと言って軽く片付けてしまいがちであるけれども、これはなかなかそううっかり言えない。厳粛な響がそこにあるはずなのである。いまの言葉で言えば自暴自棄とは違うのですね。そういう夜明け前の昏迷さというもの、どうしてもそういうところを通らざるを得ない、通過せざるを得ないのがお互いの、ある意味では宿業かも知れない。

そこで自分と世界とが一つになったという場所を考えてみると、先の「世界の方から自分にむかっている」方ではその内容は「祈り」になる。両方が向かい合っているという意味では祈りになる。「一つのものが自分自身を充実して大きくなっていく」という意味では「願い」になる。これが生と死との間をつなぐ具体的なものだろうと思う。祈りの方はこの立場では「生きる」、願いの方では「生かされる」ということになる。「願われている」という意味では「願い」をおんぶしている。願いに生かされるという心ですね。これはこの個の立場です。これを個の表現、さっき申したこれが自由であり、他を他として　はっきり自分を見ると同時に　他を見るということでは平等である。そこで、この個の自覚の内容に性格を数え上げてみると、「個」は言葉の語呂を扱うわけではないが、個は「孤」である。孤であるということは孤独である、独りぼっちである。独りであるということは独立独歩であるということである。自分が本当に自分として立っているということ。ニヒリズムでなく、ニヒリズムの暗がりを通って、夜明けに出ているのですからこれ「生」の肯定である。その生の肯定はただし「生かされている」という意味での肯定である。これは仏教の立場での言葉なのですが、ただし、その生の内容は煩悩である。それからもう一つの性格は有限の存在である。別の言葉でいえば「死」ということ、もう一つの意味では「共に生きている」ということである。独りだけが生きているのではない。皆んな別な自分が生きている。他であるけれども、いわゆる他人ではないのであって、別な自分が生きている。そういう意味での本当の共存なのである。自己が、自主性・主体性を持っているという意味では、世界の「枠」はなくなっている。しかし、有限な存在なのであるから、言うならば円周のない円の中心なのである。円周のない円の中心に自分がなっているということは、同じく円周のない円の中心が無限に、無数にあると言ってよいのである。それがみな「他」である。各々これは円周のないそれぞれの円の中心である。強い

て、無理に言葉で表せばこういうことになるが、こういう絵にかいて表せない。自己はその意味では円周のない円の中心なのである。ここまでが私の一般論です。

今日の本論は、このプリントの方に移りたい。歎異抄についてはすでに皆さん方は社会科の時間に一応は教えられているはずではあるが、親鸞聖人（一一七三 ～ 一二六二）、九十歳で亡くなった鎌倉時代の人ですね。歎異抄というのは親鸞聖人の語録をその弟子の唯円が書いたものと言われている。それが歎異抄の前半分になっている。後半分はそれについての唯円の、自分のあるいはその時代の宗教上の問題を批判したもの。歎異抄は前半分と後半分との二つに分かれれているが、このプリントに出したのはその中の前半でしかもその前半分の中から一口か二口ずつを拾い出して、諸君が今後問題のあるときに原本について読んでいただくときの手引きという意味でほんの一行が二行を取り上げただけであるから、いまこのほんの一部についてお話しすることは、ある意味では非常に全体の意味を誤るという危険がある。そのことを一応お断りしておいて、問題にぶつかったときには原本そのものに当たってよく読んでいただきたいと思います。

第一章「念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき」　つまり、この円周のない円の中心にはじめて一つに道が通じた。どこに通じたかというに、外から見るとこれが自己で、これが世界だと平面的に描けばこう描くのだが（先の図を示す）。これが一つになったときに一応立体化したものと思ってもらえばよい。自分と世界とが一つの立体になった。立体の奥に、中心に一つの穴がついてそれ自身奥に導いていく。奥というのは、自分と世界とが一つのなったところを奥と言っている。外から見ると、他にものはないのだが、それだけなのだが、しかしどこかに自分と世界とがこういう内容をもって具体的に一つになっている。そこにこの中心に一つの道がついた。いままでこの道を探していた。どこから俺は世界に入ったらよいだろうかと、この上を流転していたわけである。煩悩を背負って朝から晩まで流転していたものが、はじめて「ああここだ。世界への入り口はここだ」世界の入り口というのは同時に世界と自分とは一つのなることの他になにもない。世界というものが別にあって、自分というものがこっちにあって、デパートに買い物に入って行くように、デパートの中を歩き回っているとい

うことではないのでしょうね。ただ一つの道がついた。その道の中へ個も世界も一緒に取り入れられていく。「摂取」と言っている。ただ一つの道、唯一の道というのはその他のいろいろな行とか、条件は要らないということである。余行、雑行は要らぬ。こういうこともしなければならぬ、ああいうこともしなければならぬ、例えば真面目にならなければ、なんとか正直にならなければならぬとか、どうだこうだとかそういういろいろな余計な（それを雑行という）ものは要らぬ。ただ一つの道のみでよい。それが「念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき」である。そういう念仏が一筋の道、いわば一筋の穴から念仏そのものが、おのずからそこへその声が出てくる。そこに我々の生きているという意味があるのだ。その他にそれ以外に何も生きているより所がない。それが唯一の生きているという意味の出どころである。

自分の中からそういう声が出てくる。例えて言えば、日常の生活の中にあって、何か他人との間にことをして助けられたりして、「ありがたい」という心がおのずから出てくる。有り難いという心、そのものでそこの仕事、その行がすべて生かされている。同じことをしてもその行によって「けしからん」とか、「俺は人にだまされた」と怒ってしまったのではそこの奉仕は全然意味を持たなくなってしまう。一つの仕事を向こうとこっちとの間でやってみて有り難いという心が怒ったときに、そこの世界が成り立っていく。自分もそこに生かされてくるし向こうもそこに生かされてくる。これは相対的に言っていいわけですよ。それを人生と自分との関係にもってきている。他の行、条件は一切要らないのだ。「念仏もうす」というのではないのですよ。「念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき」　有り難いという言葉ではないのであって、有り難いと心がむらむらと心の中に出てくるところに「生きる」という意味がある。信念というのは、「信ずる」ということの意味で自分の内側に自分を統一していく心でしょうね。あるいは、自分の内側から自分を支えている心である。人生の裏から、人生の後ろから自分を支え、あるいは自分に呼びかけている。後ろから自分の方をポンとたたく。そういう声に応ずる心である。それを信心と言っている。その振り向かせる声の奥には、さっき言ったように「願」があるわけですね。「願われている」ということ、「お前は自分を忘れてここに立っているけれども、そのお前を、俺はじっと忘れず

にそのお前を四六時中抱きかかえていたのだぞ」、「お前は独り残されて淋しいと思っていたのだろうが、そうじゃない。淋しいと思っているお前そのものにお前は気が付いていないのだ。それを後ろから、朝から晩までじっと抱いていたのだ。何が淋しいのだ」そういう心に応ずる心が「信」、または「信心」ですね。つまり願われていることに応ずる心が信心である。で、願いとは極めて抽象的一般的に言って「救わずにはおかない」、それならば信心は「救われずにおかない」。妙な譬えだが、兄さんが皆さん方に「弟は下宿して困っているだろう」、「卒業期だから金が要るだろう」と金を送らずにおれない心である。諸君の方は、兄さんがそう思ってくれているかぎり「俺は、兄貴から金を貰わずにはおかない」。是が非でも貰ってやるという心なのです、それが信心なのですね。つまり兄さんの心と諸君の心とが二つあるわけではない。一つになっている心なのである。どちらも有り難いと思う。もちろん貰った方が有り難いと思うだろうが、貰った方が有り難いと思うのは初めから思っているわけではない。弟を何とかしてやりたいと兄さんの願いの心が「この金を、弟よ、是非受け取ってくれ。受け取って本当にお前に役立つように使ってくれ」という兄さんの弟を思う願いの心がそこに来ている。それに対して、それを受け取る諸君の方が有り難いと思う。兄さんもまた弟に受け取ってもらって、有り難いと思う。それを信心と呼んでいる。その意味でこの世界に入るには自分にとっては、自分だけが唯一の拠り所である。自分以外に拠り所はない。自分が自分で入っていく以外にどうともしようがない。みんなが入っていくから俺も一緒に入っていこう。みんなが入ったら俺も入っていこう、集団なら入っていこう。そんな入り口はない、入る時にはどこまでも一人で入るしかない。

その次は第二章、「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられましらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別に子細なきなり」。親鸞聖人の回心という、さっき言った心をひっくり返したときのことを恵信尼という奥さんが書いたものが発見された。これは明治か大正になってからはじめて発見された。それで、親鸞聖人に確かに奥さんがいたことが歴史的に確認されたということになっている。その手紙の中に「ただ後世のことは、よきひとにもあしきにも、生死出ずべき道とは、ただ一筋に、おおせそうらいしこと、さだめてそうらいしかば、」ここで、善人であるから、悪人だからとそ

ういう条件は一切抜きなのだ。そんな条件でここに入っていくのではない。つまり自分の道をいくということ、自分の信ずる道を行くということ、その他に別に普遍の道があるのではない。つまり個が自分の一筋の道を行く以外に、あらゆる人間が進んで行く普遍の道はない。個の道が、そのまま普遍の道である。

第三章「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」。善人でさえ救われるのだ。まして悪人はなおさら救われるのだ、悪事をするのもその人の宿業によるのだ。その宿業を自覚するところ　　自分の流転の糸が切れる。一応そういうふうに解釈される。また歴史的にはその時代の権力者に対するレジスタンスなのだと解釈する人もあるようですね。おそらくは両方の意味もあるのでしょう。はじめからレジスタンスのために書いたのではないのでしょうが、本来そのいう意味のあるものをそのレジスタンスに意味にもちょうどタイミングという意味で、こういう文章を書いたのかもしれない。

第四章「今生にいかにいとおし不便とおもうとも」、この世でどんなに自分の親兄弟が可哀想だなんとかしてやらなくてはと思っても、たとえば親が病気だ、あるいは自分の妹や弟が病気である。これをなんとか救ってやりたいと思っても、「この慈悲始終なし」。始めと終わりがないということは、一貫性がないということ、あの友人のために俺が犠牲になってやろうと思っても、三日間四日間は続くが、一週間、十日となると「ああ、犠牲になって損したなあ」と心がわれわれには出てくる。そういう心が出ないにしても、友人が行くところまでどこまでもこちらがついて行くができない。久慈の町の中まではついて行けるが、あるいはその辺りまではついて行けるが、だんだんその友が玉の脇（久慈の海岸）あたりに行って、友人が巌頭の立ったときまでついて行けるかどうか。巌頭に立ったときまではついて行けるかも知れぬがそれから先までついて行けるかどうか。「しかれば念仏もうすのみぞ、すえとおりたる大慈悲心にてそうろうべき」。自分の一本道を行く以外になにも、友人に対する友愛も、親に対する孝行も自分が自分としての道を、一本道を歩いて行く以外に別にその他何もないのだという。それを忘れて、友人のためにこうしてやろう、親のためにこうしてやろうと、この「ために」という意味は成り立たないのだということですね。つまり人間の愛の不徹底ということなのでしょう。ここにさっき申しました有限の限界がある。これを無理していけば必ず自分の内部、内側

から破綻がくる。ある意味では自分が生きていくということで精一杯なのだ。正直のところはそうでしょう。まあ、諸君に中には頭のいい人がいて、自分の勉強のほかに他人の勉強まで見てやっている人もある。ときにはそれを試験場でも応用している人があるかもしれないが、正直なところ自分が生きることで精一杯なのである。その意味では利己主義である。自分が生きていることが精一杯だと言う意味では、利己主義者であるということははっきり自分で承認したほうがよいようだな、ごまかさないで。

第五章「親鸞は父母の教養のためとて、一辺にても念仏もうしたることといまだそうらわず」。これも念仏を申すことによってお父さんお母さんの孝行にしようという、手段としての念仏ではない。有り難いということを感謝するという意味で、感謝したらまた余計にくれるかというそういう「ために」ではない。自分の力でやる感謝ではない。外からではない、自分の内から恵まれた命なのであるから、自分に恵まれた命を切り売りして人に配って報酬をもらおうとする。これが本当の意味の利己主義かもしれない、悪い意味での利己主義であるかもしれない。そうではにということ。

第六章「専修念仏のともがらの、わが弟子ひとの弟子という相論のそうろうらんこと、もてもほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたずそうろう」。一人ひとりが諸君らの一人ひとりが独立独歩なのだ。自分で自分の道を開いて行く。教師は教師で自分の道を精一杯切り開いて行く。とても教えるなどそういう余裕などあるはずがないのだ。先生というものは自分が勉強していることが精一杯ナノだ。お互いにそうなのだ。生徒の方も勿論そうなのだね。自分自身が勉強することが精一杯なのだ。教師の方をかれこれ言う、そんな余裕があるはずがない。自分の力で弟子に念仏を申させているのではない。共に恵みに生きているのですから、強いて言えばいま師弟同行とよく言うが早稲田大学の争議についても、あちらこちらこういう意味についての反省が出ているようですが、どこまで徹底した意味で言っているのか考えてみる必要がある。師弟同行した方が都合がいいのではないかというようなご都合主義では困るのですね、解決のしようがない。

第七章「念仏者は無碍の一道なり」。「念仏者」はこの読み方には二通りあって「念仏者」の「者」は本来なかったのだ、「念仏は」という意味だったのだという考えと、いや「念仏者」は「念仏する人」はという「人」という

意味を強く取った方がよいというこの二つの解釈の仕方があるようです。「無碍の一道」については、この道一筋にこの道に入ることによって外の生死という対立がなくなるということ、あるいは生死も自分のものになるということ、自分の生、自分の死だとそれを無碍の一道と言っている。どんなものも碍げない自分の主体性で、自分の自由性でこの世界と自分とが一緒に生きていくのであるから、ここにどんなものが入ってきてもそれが邪魔にならないという。これ以外の、この念仏以外の権威がないという。自分ほかに自分を邪魔するような権威を認めないということ。

第八章「念仏は行者のために非行非善なり」。自分が励む行でもなければ、自分の創る善でもない。自分というものから離れるということは、「はからい」ということ。ああしたらよいか、こうしたらよいかと、兄さんから金を貰うのに、「どういうトリックを使ったら兄貴のやつ、送ってくるだろうな。いろいろ今まであの手この手を使ってみたが、もう卒業期だからひとつ大きなトリックを使って、どっさりせしめてやろうかな」と。そういう「はからい」ではないということですね。そういうことをはからうのではない。人生に対してそのようなはからいをしたとしても、何も向こうから出てきはしない。そういう計らいを捨てること。ここが大切なところだが、「はからうな」というのではないのですよ。はからわないで済むのならば、初めからはからわないのですね、誰も。はからいたいのである。また、はからわなければ、なかなか済まないのである。早い話が、兄さんは「金送れ」という電報一つでも打たなければ、なかなか送ってこないね。しかし、はからわずにはおれない、はからわなければならない。それが有限なのでしょう。にもかかわらず、そのはからいから離れろという。うまく騙してやったから、一万円送ってよこした、「しめた」とおいうのでは感謝の気持ちも何もないわけだね。「はからうな」というのではないのだが、「はからいから離れろ」というのである。電報もなにも打たなけいで「俺ははからわないのだ」とジッとしていても、兄さんから金を送ってよこす人もあるかもしれないが、大体は来ないだろうね。つまり条件をつけないこと、自分自身に善とか行とかいう条件をつけない。

第九章「念仏申しそうらえども、踊躍歓喜のこころ、おろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきこころのそうらわぬは、いかなることにてそうろうらん

ともうしいれそうらいしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこころにてありけり」。独立独歩の個の立場、こういう自分自身の懺悔の言葉、懺悔はちょっとふさわしくない。懺悔という言葉ははじめにちょっと述べた罪の裁きに対して懺悔という言葉が出てくる。仏教の慈悲という言葉には懺悔という言葉はどうもちょっとムードが違うようですが。だがとにかく「愛欲の広海に沈没し」。溺れてしまって「名利の大山に」迷い込んでしまっているのだ。せっかく自主独立の立場になろうということもあまり喜ばないし、この人生の意味を実現することにもあまり楽しみを持たないということは「恥ずべし痛むべし」。自分自身のことですよ。こういう文章は親鸞聖人が一体何歳くらいに書かれたものだと思う。ちょっと見ると青年時代にでも書いたのではないかと思いますね。ところがそうではなくてこれは晩年に書かれている、九十歳近くになってからこの嘆きの言葉を書いておられる。ここにわれわれが自由人であるとか、自主性を持つとか、主体性を持つとか薄っぺらな言葉を出しているけれども、その実態というものがいかに重々しいものであるかということが考え直されなければなりませんね。おそらくこれを聞いた弟子の唯円も大きくここで揺り動かされたことでしょうし、これは一人唯円だけの問題ではないのでしょうね。われわれ人間そのものの問題なのでしょうね。

第十章「念仏には無義をもて義とす。不可称・不可説・不可思議のゆえにとおおせそうらいき」。自分でああだこうだ、ああでないこうでないと、ああやろうこうやろうと自分ではからうことは「義」で、そういうことがなのだ。今民主主義とか何とかいって、なんでも話し合いに持っていこうとしている。話し合いをすれば何でも解決できるかのような魔法の言葉のようになっているようですね。その魔法が魔法でないということが、昨日の早稲田大学の問題に出てきているようにも思う。話し合いの意味が成り立つその奥には、ここに書かれているように本当の意味の自主性というものが、自分の道は自分が行くのだ他人の問題ではないのだ。自分の問題は自分で解決していくのだ。自分が世界の中心なのだという、こういう本当の意味の自主性のある人においてのみ話し合いということが成り立つ。それを抜きにして単に話し合いによれば何でも問題が解決するのであるかどうか。ここのところはよく考えてみなければならない。

以上で全部終わったのですが、最後に一言、現代でい

う「人造り」。諸君も何らかの意味において人造りの影響を受けておられるのではないかと思われるのですが、この人間の世界の良い意味か悪い意味かともかく、「部分品になる」、あるいは「部分品にされる」ということでは困るな。人造りということが、文字通り「造られる」ということであるならば、それはそれは自分の自由を捨てることになるである。物としては非常によく納まるかもしれない。こういうスタイルでそこへ持って行けばちょうどぴったりだ。ああ、ここは高い値段でそこへ入れようということになれば、そこに入れられて自由も自主性も失ってこの人生をそこに固定されてしまう。そうではなしに自分にとっては自分だけがただ一つの拠り所なのです。その意味では「孤」である。孤であるけれども「独」である、孤独である。つまり独立独歩である。孤独であってしかも世界と一緒になる。孤独であって初めて世界と一緒になれる。仏教でこれを山川草木・悉皆成仏、人間だけが自由人になるのでなく、人間が自由になるときには山川草木も一切自由人になるのだ。自由の世界に生きるのだという、こういう言葉に表されていますがそういう立場に立ってのみ個人が文化の創造者であり得るわけでしょう。世界に部分品になるのではない。部分品は造られてそこに納まってしまうだけのことである。この教室にこの黒板が備え付けられているということだけでも、ある意味で誇りを感じたいような衝動があるね。こういう立派な建物の中にこういうようなスマートな姿をもって、何とも言えないこの内部的曲線を表して自分自身を表現したら、何とも言えないよい気持ちだろうと思うかもしれないが、それだけで本当に人生を過ごしていけるものであろうか。そこには「創造」という意味はない。創造されたという意味はあるかもしれないが、創造するという主体性と自由がない。われわれは文化を創造したいのである。言い換えれば自分自身をこの世界の上に「表現」したいのである。これからこの学園を出て行く人にも、残る人にも今後のご健闘をお祈り致します。

有り難うございました。